

艦息の彼は鎮守府で生
きる

匿名希望

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この物語の主人公ソウは、実史には存在しない白露型零番艦。姉妹や仲間と共に、海の平和を取り戻そうとする話。

目次

2話	1話
9	1

1話

「……」

「？」

「……と……」

「なんだ……？」

「て……と……」

「誰かが……？」

「て……と……」

「呼んでる？」

「ていとく」

「提督……？自分のことか……？」

「提督!!!」

「うおっつ!!」

起こされて僕は目を覚ます。寝ぼけ目を擦り顔を上げる。

「ようやく起きましたか：先ほどから声をかけていたんですが、なかなか目を覚まさないんですから：。」

目の前の彼女は呆れ顔で僕を見下ろす。

「どうやら僕は寝てしまっていたようだ：。」

「忙しいのは十分わかってはいますが、休憩時間もあるんですからこうも堂々と寝られては困ります。」

目を吊り上げて彼女は僕にそう言った。

「あはは：：ごめんね大淀さん、今日は日差しが気持ちいいからさ。」

「だからと言って寝ていい理由にはなってます。寝るのであれば今日の執務がすべて終わった後にもゆっくり休憩なさってください。」

「わかったよ。起こしてくれてありがとね。」

そういうと大淀さんは秘書官の席に戻り、自分の分の書類に目を通し始めた。

自分も気持ち切り替えて、目の前にある書類に取り組み始める。

昔から長い時間椅子に座っていると落ち着かなくて運動がしたくなるが、最近は一日の時間のうち机に向かっていている時間の方が多く感じる。それが悪いとは思わないがやはり適度な運動は大事だと思う。

そんなことを考えながら黙々と書類を終わらせていく。最後の一枚を終わらせて大淀さんに声をかけようとすると、廊下の方から足音が聞こえてきた。

初めのうちは小さかった足音が徐々に徐々に大きくなっていき、執務室のドアを力任せに開け、中に入ってきた。

「ぼーーーーーい!!」

そう言って元気に入ってきた張本人は僕の前までやってきて話し始めた。

「疎雨（ソウ）　　　聞いてほしい!!」

「はあ……いつも言ってるが執務室に入る時はノックを……」

「関係ないっばい！それよりも話を聞いてほしいっばい!!」

僕の小言を一刀両断した彼女、夕立は聞く耳を持たずに話し始めた。

「間違つて時雨のプリンを食べちゃったっばい！ばれないように匿つてほしいっばい！」

どうやらしようもない姉妹喧嘩のようだ……少し焦つたが問題はなさそうで安心した。

「どう考えても夕立が悪いだろうに……早く謝つてこい。」

「怖いっばい……謝るんならソウに付いて来てほしいっばい……」

「俺はまだ執務中だ。頼むんなら他をあたってくれ。」

「嘘っばい！もう机の上には何にもないっばい！だから一緒に謝つてほしいっばい……」

半泣きになりながら一緒に来てくれと頼む夕立、確かにあと少しで執務は終わるが……

「提督？終わったんでしたら夕立と一緒に行ってあげたらどうですか？後は私がしますから。」

「そうっばい！大淀さんも言ってくれてるんだし、一緒に来てほしいっばい！」
「夕立ちよつと静かに。」

そういうと夕立は先ほどまで騒がしかったのがウソのようにしゅんと縮こまった。

「大淀さん、いいんですか？」

「ええ、今日の分は終わってるみたいですし、夕立ちちゃんについて行ってあげてください。」

「そうか、じゃあ後は任せたまよ。じゃあ夕立、時雨を探しに行こうか。」

声をかけると夕立は嬉しそうに顔を綻ばせた。

「ありがとうっぼい！」

「俺だけじゃなくて大淀さんにも、だろ？」

「そうっぼい！大淀さんありがとうっぼい！」

「いえいえ、許してくれるといいですね。」

「ぼい！ それじゃあいくっぼい！」

そう言つて夕立は僕の手を取り走り出した。

「時雨はどこにいるんだ？」

「わかんないっぼい。でも食堂だと思ふっぼい！」

「それじゃあ食堂に行つてみるか。」

「そうするっぼい！」

そうして自分と夕立は時雨を探しに食堂に向う。夕立と話しながら歩いてるとすぐに食堂についた。

昼ごはんには遅い時間だが食堂にはまばらに人の姿が見えた。

「それで？ 時雨は居そうか？」

「よくわからないっばい。一緒に探すっばい。」

そう言つて夕立はぐいぐいと手を引つ張る。

すると後ろから腕をくいくいと引つ張られる。

振り向くとそこには探し人が首を傾げて立っていた。

「ソウ？ 今日の仕事は終わったの？」

「ん？ 時雨か、仕事は終わったぞ。今は夕立と一緒に時雨を探してたんだ。」

「夕立と？ 僕に何か用かい？」

すると夕立は素早く僕の後ろに身を隠す。時雨はその様子を不思議そうに見ている。

「ぼいい…」

「ほら、夕立から言わないと時雨もわからないだろう？」

「夕立？ どうしたんだい？」

「時雨え… ごめんなさいっばい。時雨のプリン食べちゃったっばい…。」

「僕の？ 別に大丈夫だよ。後でソウに買ってもらうし、良いよね？」

「ん？ 別にいいぞ？」

「ぼいっ!? 時雨だけずるいっぼい！ ソウく夕立にも買ってほしいっぼいい。」

「はいはい、夕立にも買ってやるから仲良く食べるよ？」

「わかった（っぼい！）（よ）。」

「それじゃあ間宮さんに頼んでくるから席取っておいてくれるか？」

「了解っぼい！ それじゃあ時雨行こうっぼい！」

「はいはい、それじゃあソウよろしくね？」

「そう言って夕立と時雨は席を取りに行った。それじゃあプリン二人分買いに行くか。」

2 話

side 夕立&時雨

「時雨本当にごめんなさいっぼい。」

「ん？ プリンのこと？ 別に大丈夫だよ、あれは元々夕立に夕立に買っておいだものだったからね、渡す前に食べられるとは思ってなかったけど。」

「私に渡そうと？ どうしてっぼい？」

「前に夕立がプリンを食べたいって話してたのをソウと一緒に聞いててね、それならっと言ってソウと僕で買って置いて明日にでも渡そうって話していたんだ。」

「本当っぼい？ それならソウにも申し訳ないっぼい…。」

「それに関しては大丈夫じゃないかな？」

「どうしてどう思うっぼい？」

「それは内緒だよ、すぐに言っても面白くないからね。」

「うう… 時雨、意地悪っぼい…。」

「まあ考えたらわかりそうなことなだけどね。」

「あれ？ 2人ともこんな所で何してるの？」

「ぼいっ？ あ、白露！ お疲れ様っぼい！」

「あ、白露。お昼休憩だよ。ソウが僕と夕立にプリンを買ってきてるって言うから。」

「ソウが？ ふうん、それじゃあ私もねだろうかな？」

side ソウ

3人分でも結構な出費だな…。まあ物欲は無い方だから溜まっていくだけだし、こういう所で使っていないとな。

「つと、それで時雨と夕立はどこだ？」

辺りを見渡してみると夕立と時雨が誰かと話しているのが目に付いた。

「ん？ あれは白露か？ たかられるだろうし仕方ない…。自分の分を白露に…。」

「あ、ソウ〜！ こっちこっちっぼい〜！」

「おー、白露も昼休憩か？」

「そうだよ、それでソウ、私にもプリン頂戴？」

「はあ：・ほれっ、余分に買ってきておいて良かったよ。」

「あれ？ ソウの分は良いのかい？」

「ん？ 大丈夫大丈夫、白露に一口分けてもらうから。良いか？」

「ん？ いいほよい。ほうはべもう食べちゃってはつへるけどへど。」

「ああもう、落ち着いて食えつて、ほっぺたに付いちやつてるだろ。こつち向け、拭いてやるから。」

「あ、ありがと。」

「ん、夕立と時雨も落ち着いて食えよ？」

「っぼい！ ありがとうっぼい。」

「ありがとね、それでソウ？ この後はどうするの？」

「ん？ この後は今週末の演習に向けての艷装のメンテナンスがあるからつて、明石と夕張に呼び出されてるぞ。」

「その演習つて大本営とだったよね？ 私たちも見学していい？」

「見学者は今日お夕食のときに希望者を聞くつもりだぞ？ まあ遠征とかの任務が入つてたらそつちを優先してもらうけどな。それでも面白くないと思うけどなあ：・俺がひたすら耐えてるだけだし。」

「ソウが攻撃に回ったら一瞬で終わっちゃうっぽい。」

「そんなことねーよ。毎回毎回ギリギリの戦いだし、今回はどうなるかねえ…。」

「それは相手側のことを言ってるのかい?」

「それもあるけどな、まあ夜戦に入る前に旗艦大破で終了が楽なだけだな。」

「あれ? 今回って旗艦大破で終了のルールっぽい?」

「それだったら大本営の方も気合が入るだろ、俺だけなんだし実際中破でもう降参なんだけどな。」

「私も参加できればよかったのに…。ソウばかりずるいよ。」

「もう決まったことだし文句は言わない。それじゃあ食べ終わったことだし、そろそろ行くか。三人はどうする? ついてくるか?」

「私は行こうかな? 久しぶりにソウの艦装見せてもらいたいしね。」

「僕も行こうかな。」

「夕立も一緒に行くっぽい!!」

「了解。間宮さーん、プリンごちそうさまでした。」

プリンを食べ終え、ゆっくりとした足並みで工房へ向かう。三人で遠征や出撃、演習のことを話しているとすぐに工房の入り口についた。

「明石さんと夕張さんに、声かけたほうが良いっぽい？」

「いや、連絡はしてあるし、このまま入って行っても大丈夫だろ。」

二人には前日に声をかけておいたので、そのまま中に入る。

「工房に来るのも久しぶりだな。って言ってもそんなにたつてないと思うが。」

「最近ソウは執務室に籠りっぱなしっぽい。」

「そんなに長い間籠ってたつもりはないんだけどな。」

「ソウがそう思ってるだけで、僕たちから見たら結構長いこと籠りっぱなしになってるよように思うよ?。」

「そうそう、仕事以外で顔を見ることがないから、話すことができないっていろいろなところでも聞くよ?。」

「そっかあ… それじゃあこの演習が終わってからでもみんなと話す時間を取ろうかな?。」

「そうするといいいよ、ところで今回の対戦相手は誰なんだい?。」

「ん? それは今夜、夕食の時の報告で伝える予定だよ。」

「でも大本営との対戦は、だいぶ前からソウvs一軍って形になってるから大体の相手

は同じなんじゃない?」

「それでもだよ、まあその試合に勝つために今日はメンテに来ただけだな。つと
言うわけで、明石、夕張、来たぞ」

「あ、提督! お疲れ様です! ようやくメンテができますよ!」

「ああ、そんなにメンテが楽しみだったのか? 俺が出撃する時とかにメンテは任せて
るんだが。」

「それでもなんですよ! 提督の偽装は唯一無二ですからね! 皆さんの偽装は一部
を除いて量産されていますけど、提督の偽装に限っては、どの偽装も一点物なんで、毎
回のメンテが楽しみなんですよ!」

「って言ってるけど、そうなのかい?」

「ん? そうだぞ。俺の偽装は俺が持つてきたものだけだからな。開発でも出ないし、
俺がほかの鎮守府で建造されることも、ドロップすることもないからな。」

「そうですよ! だからメンテができるのは提督に任されてる私と夕張だけなんですよ
!」

「はいはい、その話は後にしてメンテナンス始めるぞ。」

「任せてください! 今回のメンテも、大成功させますよ!」